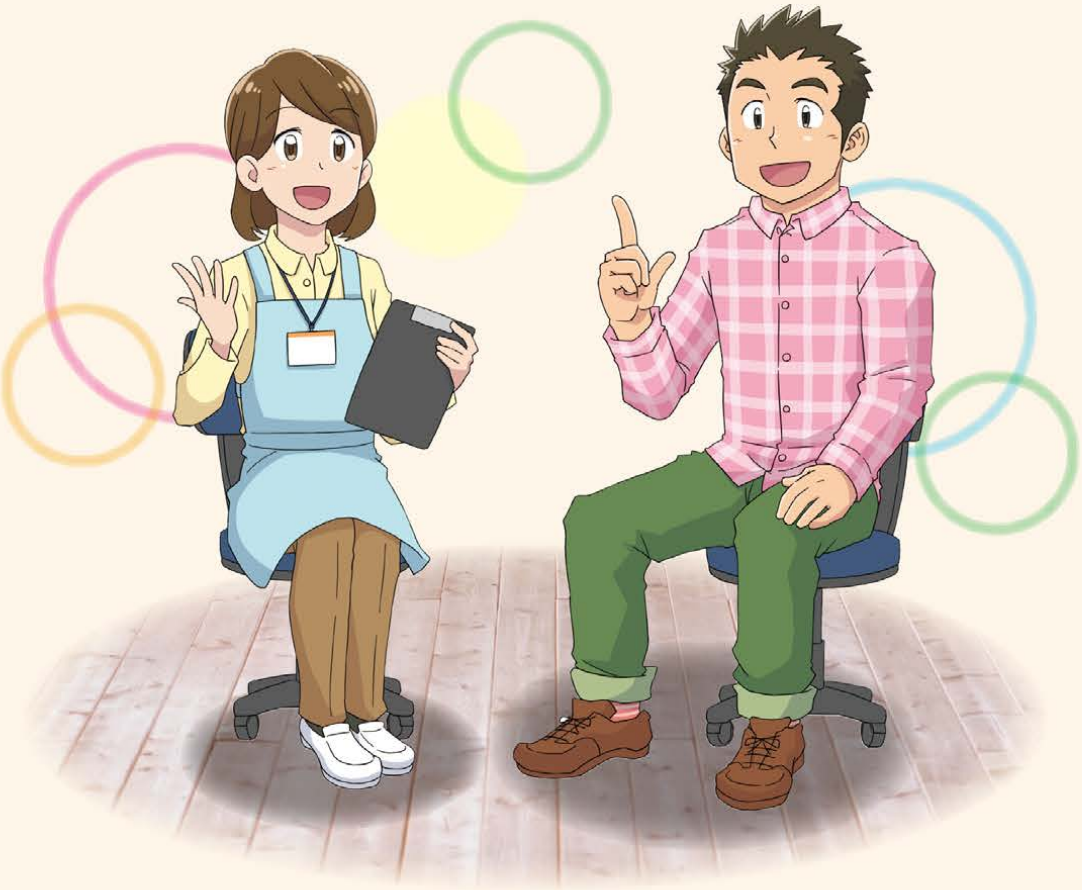
「あなたになら話せる」その安心がスタートライン

保健師の多様なセクシュアリティ理解促進のために

日本の新規HIV/AIDS報告数の約7割は男性同性間の性的接触によるものです。エイズ予防対策では、MSM（男性同性間性的接触者）は特別な配慮と対策を必要とする個別施策層とされています。私たちは、HIV予防対策と陽性者支援の最前線に立つ保健師のみなさんの意識調査（2011年近畿圏全域保健師対象：有効回答数1,535名）と研修（2012～13年近畿2府4県で実施：参加者数143名）を実施しました。その結果をご報告します。



平成25年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業

HIV感染予防対策の個別施策層を対象にしたインターネットによるモニタリング調査・認知行動理論による予防介入と多職種対人援助職による支援体制構築に関する研究
研究代表者　日高庸晴（宝塚大学看護学部）

保健師におけるセクシュアリティ理解と援助スキル開発に関する研究
研究分担者　和木明日香（千里金蘭大学看護学部）
研究協力者　岩井美詠子、岡本学、尾崎晶代、西村由実子

http://health-issue.jp/

1 MSMとは誰?

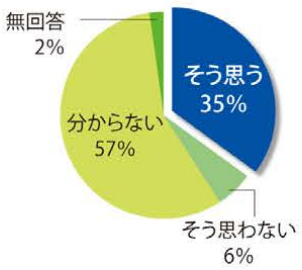
男性とセックスをする男性をMSM(Men who have sex with men)と呼びます。男性とセックスをする男性(ゲイ男性)と、男性・女性の両方とセックスをする男性(バイセクシュアル男性)の両方を含みます。性的指向(どの性に性的魅力を感じるか)や性自認(自分がどの性であると感じるか:性アイデンティティ)とは関係なく「行動」に注目した呼び方です。

日本におけるMSMの存在割合は、2009年に20〜60歳未満の男性を対象に実施した調査[1)]によると、これまでに性的な魅力を感じる対象に「同性のみ」あるいは「同性と異性(女性)の両方」と回答した割合は3.7%、これまでの性経験の相手が「同性のみ」あるいは「同性と異性(女性)の両方」は2.0%、「性的な魅力を感じる」「同性との性経験」のいずれか・両方を回答した割合は4.3%でした。

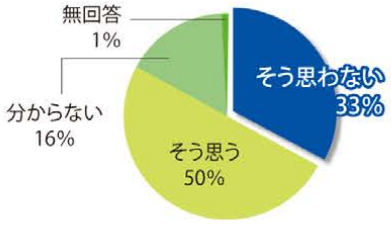
2 保健師の知識の現状

以下のグラフでは2011年の調査でわかった保健師の知識の現状を示しています。
グラフ中ブルーが望ましい回答(正答)です。

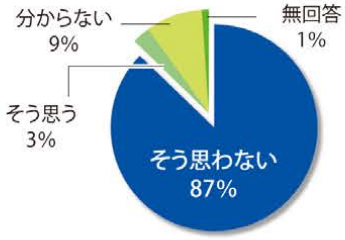
男性同士で性行為をする人をMSMという



同性愛者になるか異性愛者になるか、本人の希望によって選択できると思う



同性愛は精神的な病気のひとつだと思う



このように、保健師のセクシュアリティに関する知識の理解度が内容により異なる理由として、学ぶ機会が限られていることが考えられます。本調査では、保健師養成課程において同性愛や性同一性障害について学んだことがある人の割合は12.1%、保健師になってからの研修で学んだことがある人は41.2%でした。

保健師は、日々の相談業務のなかでMSMを含むセクシュアルマイノリティの人々とも関わります。セクシュアリティは人間のQOLに深く関わることです。今回の調査では、保健師の79.9%が「世の中の多くの人は、同性愛に対して偏見を持っている」と認識していました。言葉の意味を知るに留まらず、これらの人々の生きづらさを理解することが、セクシュアリティから派生する健康問題に対する支援を行うために重要です。

3 MSMの抱える健康課題と生きづらさ

社会においてマイノリティであるがゆえに、多くのMSMは常に精神的なストレス状態にあります。その結果、右図のように抑うつや不安傾向の割合が他の集団より高いなど、健康に関わる問題が山積みです。これらがHIV感染リスク行動の背景要因と考えられます。さらに、精神保健や思春期保健の対象者のなかにも、MSMをはじめとするセクシュアルマイノリティが存在しています。

健康に関わる問題が山積み

社会的ストレスや少数者ゆえのストレス

- 精神的健康状態が悪い
  → 抑うつや不安傾向が他集団より顕著
- 慢性的な精神的ストレス
- いじめ被害経験
- 自殺未遂率の高さ
  → 10代の自殺者の3割は性的指向と関連
- 性的被害率の高さ
- アルコール・薬物使用率の高さ

4 日常の援助場面で出来る工夫

相談者や受検者の誰がMSMかはわかりません。MSMにとっても誰が自分たちの理解者となってくれるのかはわかりません。「性的指向を言ってくれないから・話してくれないから」と、相談者・受検者のせいにしないでください。性的指向を知らなければ支援できないのではなく、性的指向を言いやすくする雰囲気を作る努力自体がすでに支援です。**「専門職としてサポートしますよ!」**というメッセージを出すことが重要です。彼らの多くは専門職からの援助を求めています。日常の援助の場面で、こんな工夫ができます。

1 MSMの生活や思いを、理解しよう

MSMとはどんな人たちでしょうか?健康リスクの側面ばかりではなく、彼らの日常生活や思いを知る機会を持ってみませんか。それによってMSMへの心理的な距離感が縮むでしょう。さまざまな媒体から、当事者の声に耳を傾け、生活や思いを知ることができます。

1 MSMが登場する漫画・映画・小説を読んでみる。

- 石川大我「ゲイのボクから伝えたい『好き』の?がわかる本 みんなが知らないLGBT」太郎次郎社エディタス
- RYOJI+砂川秀樹「カミングアウト・レターズ」太郎次郎社エディタス
- よしながふみ「きのう何食べた?」モーニングKC講談社

2 MSM当事者によるホームページやブログを通して声に耳を傾ける。

3 様々な研究報告書より、現状や社会背景を知る。[2)]

4 ゲイバーや当事者団体のイベントなどに行く。

2 HIV検査・相談および陽性者支援の場で出来ること

日本の新規HIV/AIDS報告数の約7割をMSMが占める状況から、HIV検査・相談とHIV陽性者支援は、MSMに関わる場面として重要です。

1 検査・相談では、対象者がMSMかもしれないことを念頭におきましょう。

- HIV検査時、MSMのリーフレットをさり気なく置く
- 男性に相談対応する際いずれの可能性(ゲイ・バイセクシュアル)も視野に入れた話をするよう心がける
- 異性との性行為を前提とした質問をさけるなど、受検者の性的指向にとらわれない雰囲気づくり
- 検査の面談や問診票の中で、性的指向についても尋ねる

2 検査・相談や陰性告知では、その人にあった予防方法を考えるきっかけを作れます。受検者にとって検査に来るのはとても勇気のいることでHIVへの関心が高まっている時です。その機会を大切にしたいものです。

- 陰性告知の際、告げた後に受検者がどう感じ、考えたかを聞く
- 感染のリスク行動を本人と振り返り、予防行動について情報提供し、今後どうするかを一緒に考える
- the 100 Answersというリーフレットの活用[3)]

3 常に、陽性告知や陽性者支援にも対応できるよう準備をしておきましょう。

- HIV陽性告知の際に活用できるパンフレット(たんぽぽ[4)]など)を用意しておく
- 陽性告知場面での紹介先としての病院に紹介方法等を確認
- 陽性告知対応マニュアルの整備
- 陽性告知支援も想定して対応すること

4 他の職種と連携しましょう。

- 医師や臨床心理士、ケースワーカーなど他の職種と連携して対応しましょう。

3 いろいろな性的指向の人がいることを念頭に、業務に臨みましょう。

母子保健や精神保健、学校保健など地域保健医療活動のすべての場面で、対象者がセクシュアルマイノリティである可能性があります。表に出ている健康課題の背景に性的指向や性自認の悩みがあるかもしれません。保健師はセクシュアルマイノリティの理解者となることもできますし、性的指向の多様性について社会に発信し、理解を促すこともできます。

1 常にいろいろな性的指向があることを念頭に置く。

2 レインボーフラッグのバッジをつける。

女性同性愛者(Lesbian)、男性同性愛者(Gay)、両性愛者(Bisexual)、性同一性障害(Transgender)など性的指向や性自認において、異性愛者(heterosexual)とは異なる人々のことを性的少数者=セクシュアルマイノリティ(sexual minority)といいます。それぞれの頭文字をとりLGBTと略すこともあります。レインボーフラッグは、LGBTのプライドの象徴となっています。セクシュアリティは、単に男と女に分けられるのではなく、虹のように多様であるという意味が込められています。

3 学校保健との連携の際、セクシュアルマイノリティの存在について伝える。

5 MSMからの声

これまでの調査研究報告書[2)]や今回の調査（＊表示）で聞いたMSMの声の一部を抜粋しました。

性的指向について

本当は女性を愛したいし、ゲイであることに後ろめたさを感じる。

以前自分がゲイかバイかもしれないと認識したときはショックで悩み抜いた。社会人になってゲイコミュニティに触れ、決して極端なマイノリティではないと知り、これもありなのかな、と思うようになった。

自分がゲイであることを受け入れられたし、周りも受け入れてくれたので今は特に悩んでいないけれど、将来のことを思うと不安になる。

検査について

検査で対応した人たちは、みな優しくてよかったが、セクシュアリティのことを気にしすぎて、逆に腰が引けて、気を遣いすぎている感じがした。（＊）

検査が終わって帰るとき、いっぱい説明してもらえたので「ありがとうございました」と言ったら、「勇気を出してきてくださってありがとうございました」と逆に感謝され、すごく気持ちがよかった。（＊）

私は検査を受けたことで、その後リスクを下げるための意識作りの機会になった。検査結果を伝えるときに今後について話し合う機会を与えてもらったらよかったと思う。「リスクを下げる方法を今後何かしていかれますか?」や「リスクを下げているつもりでも、不安に感じるようなことはありますか?」などの一言があるといい。（＊）

保健師をはじめとする、専門職へのメッセージ

ゲイは性的指向が異なるだけであとは普通の男性です。抵抗無く接してくれることを望みます。

悩みの原因や背景に「ゲイであること」が含まれている時にそれを全部説明しにくく、かといってそれをきちんと話さないと、その結果としての現在の状況をわかってもらえないのではないかと不安になる。

感染した時の情報が不足していると思う。もし検査結果で陽性と分かった際の心構えやその後の手続きや必要な情報を事前に小出しにしてもらえると嬉しい。検査結果が陰性だった場合は心にもゆとりがあるので素直に聞けると思う。（＊）

本当はセーフセックスがしたくても、なかなか「コンドーム使おう」と言い出せないままセックスが始まってしまうことが多い。

もっと自分の性的指向を気軽に話せる社会になって欲しい。そうすれば、性感染症予防についてももっと気軽に話し合えるのでは。

6 保健師の声

今回の調査および研修を通して保健師のみなさまの様々な声を頂きました。ほんの一部ご紹介します。

個人としては受けいれがたいと感じている面もあるが、仕事としては「受け入れられないのではないか」と不安に思いながら生活されている本人の気持ちや生活背景に思いをはせて業務に臨みたい。

MSMだから何か特別扱いが必要、と思わなくなった。"ふつう"の対応でよいと思う。

MSMに関する情報媒体に自らアクセスするようになりました。そうすることで、自分の中でのMSMとの距離感がせまくなった気がします。

カウンセリング時に、積極的に性的指向などについて尋ねることができるようになった。そうすると、意外とあっさり反応が返ってくると感じている。

参考資料

1）厚生労働省エイズ対策研究事業「男性同性間のHIV感染対策とその介入効果に関する研究」（研究代表者：市川誠一）
2）厚生労働省エイズ対策研究事業　ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2（研究代表者：日高庸晴）
http://www.j-msm.com/report/report02/index.html
3）the 100 Answers：セックスの際にコンドームを使いやすくするための言い方や方法について、ゲイ・バイセクシュアル男性の実際の体験をアンケートで聞いて作られたリーフレット。ダウンロードし、面談の場面などで活用できる。　http://health-issue.jp/the_100_answers.html
4）たんぽぽ：HIV陽性とわかった方のための支援情報等を掲載した小冊子（40ページ）。東京都が作成したものを東京都の許諾を受け、大阪府版に改定したものがある。
http://www.pref.osaka.lg.jp/chikikansen/aids/